

**平成28年度 第3回 南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会**

<b>日 時</b>	平成29年1月12日(木) 17:15~19:15
<b>場 所</b>	南三陸町役場 2階大会議室
<b>次 第</b>	<p>1 開会      2 会長挨拶      3 協議等</p> <p>1) 前回の振り返り      2) 地域資源プラットフォーム 機能と役割      3) 地域資源プラットフォーム ゴールについて      4) 地域資源プラットフォーム 各事業について      5) 地域資源プラットフォーム 目標数値について      4 その他(事務連絡等(次回日程、他))      5 閉会</p>
	<p>&lt;資料&gt;</p> <p>「第3回 南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会 次第」      「資料1 地域資源プラットフォーム 機能と役割イメージ Ver2.0」      「参考資料 森里海ひとのベストバランス」      「資料2 地域資源プラットフォーム ゴールについて」      「資料3 地域資源プラットフォーム 各事業について」      「資料4 地域資源プラットフォーム 目標数値について」</p>
<b>出 席</b>	<p>●委員(敬称略)</p> <p>&lt;出席: 12名&gt;</p> <p>佐藤太一(FSC/FM)、小野寺邦夫(FSC/COC)、後藤清広(ASC)、      阿部寿一(ASC/COC)、櫛田豊久(バイオマス産業/転換)、      佐藤克哉(バイオマス産業/循環)、工藤真弓(山さございん)、      阿部富士夫(宮城県漁業協同組合)、松田恭子(学識者)、佐藤洋子(公募委員)、      最知明広(行政/副町長)、小山雅彦(行政/環境対策課長)</p> <p>&lt;欠席: 6名&gt;</p> <p>川廷昌弘(FSC普及)、阿部民子(海さございん)、      阿部國博(南三陸農業協同組合)、高橋長晴(南三陸森林組合)、      安藤仁美(公募委員)、高橋一清(行政/産業振興課長)</p>

●事務局

企画課：阿部課長、檀浦室長、太齋係長、阿部主査、松本主事

産業振興課：佐久間参事、佐藤補佐、氏家係長、及川係長

環境対策課：星補佐、佐藤係長

事務局補佐：山内（株式会社 ESCCA）

## <1. 開会>

## <2. 会長挨拶>

会長：第 3 回目の委員会は 11 月 22 日の予定だったが、津波警報が発令され延期になってしまった。当委員会は昨年 2 回開催されたが、まだ各論には至っていない。4 回 5 回と会議が目白押しに続くが、皆さまには忌憚ない意見を頂戴したい。前回 2 回目の委員会が昨年 10 月末の開催で時間が大分経過しているため、振り返りから行いたい。

## <3. 協議等>

### 1) 前回の振り返り

事務局：2 回目の委員会では、自然環境活用センター（以下、ネイチャーセンター）の事例についてお話し、1 回目に続いて改めて南三陸町の現状、課題、可能性を出し、そのうえで民間がやるべきこと、官がやるべきことを分類、その両方に属さない部分をプラットフォームが担うイメージであることを確認し、プラットフォームの機能について再整理した。例えば研究開発。自然と人間の間の関係性や資本について学んでいく関係の学問をつくつたらよいのではないか、実証されていないことを解明することをやっては、また、セルロースナノファイバー等の産業につながる研究をやると良いのでは、という研究開発についての領域の意見が出された。もうひとつは教育。特に子どもたちの教育。“鮭的人材育成”という言い方がされていたが、町を出ても再び戻ってきたいと思うような、町の魅力について学ぶことのできる内容等の意見が出た。研究内容を通訳して子どもたちに伝えていくことも大事といった意見も出された。ASC 認証、FSC 認証について認知がない、コラボ商品ができていない、南三陸ブランドもつくっていかねば、等のビジネス寄りの話も出た。行政でやるべきところの松くい対策や、林道農道の整備等、行政への要望を伝える機能も必要、こうした意見が出され事務局が整理した。

### 2) 地域資源プラットフォーム 機能と役割

### 3) 地域資源プラットフォーム ゴールについて

・事務局より、資料 1 に基づきプラットフォームの機能と役割について説明した。また、資料 2 に基づきプラットフォームのゴールについて、参考資料の森里海ひとのベストバランスにも触れながら説明した。

会長：ひとつの案として事務局より提示した。これについて意見を頂きたい。

委員：参考資料の絵だが、まさに、1 月 16 日に魚市場で東京大学の先生たちが、湾内の調査結果を漁業者に発表する機会があり、期待している。ベストバランスについての話は、漁業の進め方を考える上でも参考にしたい部分である。

委員：サステイナビリティブランドについて具体的な成功事例が必要。

委員：腑に落ちている。ベストバランスの図は、森里海を調査することで導き出される情報の一例であろう。これと産業、例えば山づくりでいえば植生モニタリングや水質モニタリング等、科学性の部分と生業がマッチするような林業が理想のかたち。これが町全体に広がっていければ持続可能な産業を作ることができるし、可視化することによって、持続可能性を維持するための改善点等が分かりやすく、個々の産業のクオリティアップにもつながる。まさに持続可能な生産につながるのではと期待している。

事務局：純粋な研究はありだが、産業をどう強化していくかがポイントである。ブランドを強くするための研究を新しくやっていくことが必要。

委員：研究者としても社会貢献ができるし、生産者も商品についての質や背景を具体的に語れることにもつながるのではないか。

委員：確認だが、サステイナブルということを地域の中で目指す、ということがこのプラットフォームのゴールなのか。1回目 2回目の委員会では、ブランディングという話があった。商品力がないと市場づくりにはならない。それを支えるのがこのプラットフォームの付加価値になっていくのだと思うのだが、このプラットフォームでは、地域のサステイナビリティを目指しはするが、売れるものづくりは担わないのか。そこまでやらなければサステイナブルが果たせないと思うのだが。

委員：サステイナブルをベースとした商品づくりをしていく、ということではないか。

委員：サステイナブルは必要だが、商品づくりのブランディング、例えばおいしい牡蠣の商品づくり、そういうところまで話していくのか。それとも環境としてサステイナブルな産業の関わりを考えていくところまでなのか。

事務局：資料 1 の機能図からいくと両方であり、それぞれを地域商社と協議会の部分に込めている。自然が主役ではない。あくまでも自然と人間がどう付き合っていくべきかが重要。良い商品をつくっていくから生業が続いていく。環境のサステイナビリティと売れるモノづくりのどちらか一方ではなく、どちらも必要であると考えている。

委員：両方必要であることには同意する。ただ、プラットフォームの立ち位置として、どこまでを範疇とするのかを確認させて頂きたい。

委員：参考資料のベストバランスの図は難しい概念である。成り立てば素晴らしいが、例えば漁業の資源管理ひとつとっても、大きくなった魚を獲れば資源にも良いことは分かっているが、現実は大きくなるまで待てず小さな魚を獲ってしまう。大きな魚が高く買われるといったような制度が整備されていないからだ。ベストバランスを考えたときに、例えば、今は林業はもっと我慢してくださいとか、逆に今が切り時だから木を切ってくださいとか、そうしたことにまで踏み込むのか。その際に、一方で、地域商社機能部分で持続可能性を意識してつくられた商品を買い支える機能がないとなかなか成り立たない。

委員：売れるものづくりとサスティナブルと両方必要だが、プラットフォームはどこまでを管轄するのか。

委員：本来は両方やっていかないと意味がない。良いものをつくるには、地域商社機能をもって単価を上げ、売れるように支えていく必要がある。

委員：木材の商品開発等個別でもできる部分の優先順位は低く、同じようなことをそれぞればらばらでやっている人たちを横軸でつなぎ、その方向性ならコンセプトに合っているということでお墨付きを与える、そしてその活動があるから町が良くなっていると認識してもらえるようになっていく、というような、個別ではできないことをやるのがプラットフォームのメインの役割だと考える。加えて、個々の商品開発はそれがやるにしても、事業を持続させていくためにはきちんと収益が成り立つようにしていかなければならぬため、その部分の事業サポートは必要であろう。

委員：個々の商品開発は個別の事業体が努力する領域である。A と B が重なるともっと良いものができる、というマッチング部分はプラットフォームが手伝う領域だと思う。商品開発は企業努力。ただ、もっとこうすれば良いものになる、という場合はプラットフォームが口を出しても良い。地域商社が売るものは、目指す方向性が一定であり、一定条件がクリアされている、尚且つ商品としても良いものである、ということになれば、南三陸の意図を認知してもらえる機会につなげられる。

委員：個人だけの力では足りないもの、広報等もプラットフォームが担うと良い。

委員：作ったものを売るだけではなく、単価を上げるだけのビジネス設計のサポートも必要。もっと欲を言えば、良い品質とは何かを分析してもらうために、研究者にこういう研究をしてください、と持ちかけることも必要で、そこの企画力も地域商社には求めたいところ。個々の民間事業者はアイディアを持っているので、ヒントを提供すれば細かい開発

はできる。しかしヒントの部分がないまま走ってしまっては成立しないであろう。

事務局：昨日（委員である）松田先生の講義があった。ただ先生の話を聞いて納得しても、具体的な行動にどう移したらよいか分からぬ事業者もいて、そうした事業者に伴奏する存在が必要だと感じた。

委員：地元の生産物を使ったもので付加価値の高いものをデザインしつくっていくことも大事だが、根本的に南三陸の自然環境が原点にあり、そこが守られていないと自然というものは持続しないしその恩恵を受けて成り立っている産業も持続しない。ここを掘り下げ、森里海、生活者含め、環境に対するアクションが必要。官民協力して方向性を打ち出すのがプラットフォームの核なのではという気がしている。

委員：アミタさんの BIO は町民の皆さんも協力しているひとつの成功事例。例えばホヤ殻は産業廃棄物で課題だが、それを燃料や肥料として再生でき、その過程で生活者を巻き込むかたちがつくれるならば、極端な話、商品自体の質が大して良くなくても PR していくだけの価値があるのではないかと思う。

委員：BIO を通じて生ごみを集めてできた液肥を使って試験的に作った米がすごくおいしい。「液肥米」として出しても良いが、例えば「めぐりん米」とか、「めぐりんネギ」とか、命が巡っていることが分かるような名前を付けて出すだけでも分かりやすい。「サスティナブルアクション」と言われても町民は分からぬ。アクションを増やしたいということであれば、分かりやすくする必要がある。難しいことも簡単なことも、共通の認識をまず持てるようにすることが大事。教育や市民活動へのつながりを意識しているのであれば、分かりやすさは大事なことである。

委員：作ったものを売る前に、きちんと全体の事業の設計をした方が良い。液肥を使っていておいしいという部分を、例えば液肥を使っているものと使っていないものとでは、使って育てた米の方がタンパク質の含有量が〇パーセントで低いからおいしいとか、誰もが納得できる具体的な根拠が示せると良い。従来は仙台に行かないと分析できないようなことが、自分たちの手で日常的に科学的な裏付けを検証できるような環境があると良い。

委員：一般的にはひとめぼれが全国的に主流。日本で一番おいしいと報道もされている。しかし実態は、生産者にとってひとめぼれは冷害にも強くて生産しやすいという事情もある。実際、ひとめぼれの生産者に聞くとササニシキを食べているということも。ササニシキはアレルギーが出にくいいらしい。こうした品種についての違いを科学的に裏付けるような研究があつても良い。

委員：商品としては、ASC の牡蠣とササニシキのタイアップ等も考えられると良い。

委員：市民活動にもつなげる機能、マルチセクターという部分がそうなのだろうが、国や町への提言だけではなく、市民への発信にも注力し、当事者を増やしていくことにつなげていくことも必要だろう。そうするとローカルファーストという、地元の物を買いましょうという動きにもつながっていくんだろうと思う。またキーポイントは商社機能。良いものをつくれて売る点については一次産業者は苦戦しているだろうからサポートが必要。企画してブランド管理して売っていくところまで担ってもらうと良いと思う。

委員：サスティナブルと言われてもよく分からない。命が巡る町と言われた方がイメージが持てる。「トウキロール」についても、南三陸の循環への取り組みについて認知されてくれれば、例えば「めぐりんロール」と名付けることで消費者にも商品の背景にあるストーリーが分かりやすいものとなる。

委員：商品を通して南三陸がサスティナブルを目指していることが分かる。食べて知って行ってみよう、ということにまで至ればブランドである。南三陸らしさというものが色々な商品から伝わるかたちを目指したい。売っていくためには商品を選びすぐらねばならず、その基準が南三陸らしさをきちんと守っているもの、ここを言語化していくのもプラットフォームの役割。

委員：ブランド化の話もいろいろ聞いていて、南三陸はストーリーが強いが、機能的価値の部分が十分に表現しきれていないという話もある。

委員：機能的価値の提示も研究機能に期待したい。

委員：品質そのものを評価する測定屋さんとしての機能に期待する。商品に対する評価と生産方法に対する評価を研究機能には求めて良いのではないか。

委員：アウトプットの品質の良さと、それをつくるプロセスの中で何を守ったほうが良いのかというところの関係性については、研究機能に期待したい点。そのうえで、選りすぐるという部分でアウトプットの品質においても基準を持たなければならないが、サスティナブルということも含めて生産プロセスにおいても一定基準を設け、皆で管理して守っています、という点で信頼を高めていく。研究機関と連携できると良い。

委員：昨年 3 月 30 日に ASC 認証を取得したが、昨年末からノロウィルスの話が出て、認

証をとっても、マスコミ報道の影響もあり、思うような結果が出せていない。現場では、ASC 認証を取得したのにどうして自分たちが期待する価格にならないのかという大きな課題に直面している。しかしノロウィルスが出てきてしまうと自分たちでは手の打ちようがない。現場に来てもらって戸倉のファンになってもらいたい、ということで作ってはいるが、ASC 認証を取得したことに対し思うように成果が出せていない。想いと現実のギャップを感じている。

委員：どうしても商品を高く売ることに意識が向く傾向にある。日本で一番高い牡蠣を作っている生産地があった。その近くに 2~3 ランク下回る牡蠣を作っている生産地があり、商品は少し安い。しかし生産者の手取りは、2 番手 3 番手の牡蠣をつくっている人たちの方が高かった。日本一高い商品は作りたいが、いかに最低限安定して暮らせる所得を得ていけるかが大事。

委員：米の世界も同様。単価を追い求める人もいるし、収量の多い品種をつくって生産コストを下げ大手牛丼チェーンに買ってもらって持続的に安定した経営を目指す人もいて様々である。単価が安いからブランドではないということではなく、費やした労力分はきちんと回収できる状態にすることが重要ではないか。牡蠣の話を伺うと、ASC 認証を取得したことと、基本的な衛生の部分、安心安全の付加価値を上げる仕組みはまた別物だと思う。この部分を同時に手掛けることが必要な時代になっている。例えば個々の経営では用意できないもの、共同で用意しなければならないものもあり、そこの合意形成を担っていく機能も必要かもしれない。青果場はオープンスペースがまだ当たり前。ただ、欧州に輸出するならば HACCP が最低標準という時代である。魚市場もオープンスペースで当たり前にやってきたことが、閉鎖した状態でやらなければならない、こういう時代になってきていることも踏まえておく必要がある。

委員：単価を上げることがなぜ必要か。科学性を追い求めたときに、通常の生産コストよりも高くなることが想定される。例えば認証審査料等。その部分を回収するためには単価が少々高くなるであろう。フェアな値段で売れる環境は必要である。

事務局：各委員の意見をまとめると、地域商社機能がないと成り立たない、分かりやすく伝えなければならないということについては共通意見が出された。どう持続可能を目指すのか、という点については、この後個々の事業内容や組織をどう成り立たせるのか、という議論にも入っていくので、引き続き議論したい。

委員：両方の天秤が必要。商品力があつてこそその話。そこを支える情緒的価値の話だけを取り上げる場なのか、そしてあの商品力の部分は各企業が考える部分なのか。ストーリ

一ができあがっても商品力がなくては、売れるものになっていかない。

#### 4) 地域資源プラットフォーム 各事業について

会長：(4) 各種事業案の各論に進んでいきたい。

事務局：残り 1 月 30 日の第 4 回、2 月 13 日の第 5 回。目標は地域資源プラットフォームの基本構想を議論し、とりまとめて町長に提出し判断してもらう。来年度は 3~4 回の協議の場を設け、町からのフィードバックを受けて基本計画を作り設立に向けて動く。来年度後半はブランドの基準とは何かを詰めていきたい。各論を話せるのは本日と第 4 回の 2 回のみ。第 5 回は提言書の内容の確認となる。それを踏まえて議論をお願いしたい。

- ・事務局より、資料 3 に基づき、各事業案について説明した。

委員：研究機能のところに、論文執筆についての記載があるが、研究がシーズでそこから発生するというだけでなく、地域を成り立たせるための研究を企画して持ち込むということも可能な限りやってもらいたい。大学の先生は高度な知的好奇心はあるもののマイペースな部分もある。産業とつなげる場合は、意識的に町が抱えている課題について研究者にお願いして研究してもらう場面も必要になってくる。その機能を入れて頂きたい。

委員：気仙沼市で「けせも」という活動がある。牡蠣殻をどうしようか等の課題がいくつもあり、可能性がありそうなものに対して、研究費を出すから研究をしてもらいたいと大学の先生に依頼、研究結果を受けて事業化しようと生まれた商品もある。こうしたモデルはあり。

委員：大学の先生は論文の本数で評価される部分もあり、科研費を意識した研究内容に偏る傾向がある。そうではなく、企業も多少お金を出し、地域に貢献できるような課題について大学の先生に研究してもらうという展開も実現させたい。

委員：東北薬科大学の佐々木先生をお呼びしセミナーを開催する予定。青森の藍から消臭スプレーが生まれた事例について話していただく。ある課題に対して解決するための商品化をどうしたらよいのか、という先生への相談から始まったという。大学の先生も、科研費とは別の収入源ができ研究できるのであればやる気も出てくるのではないか。

委員：次世代人材育成事業の中身はいりやどさんが行っている中身と近い。いりやどさんから私たち事業者の方に ASC の話等をしてほしいというオーダーがあり、応じている。プラットフォーム自体がいりやどさんをもう少し大きくしたようなイメージなのか。

事務局：プログラム開発を一緒にやっていくイメージ。つくったプログラムをどう提供してお金を得るかは難しいことではあるが、高度な内容を取り入れる等想定される。普通の体験ではできない、例えば銀鮭を食べるだけではなく、鮭のアスタキサンチンを採取してみようとか、他ではできないようなプログラムをつくるイメージ。他機関、団体とも一緒にやれるところはやっていく、柔軟な体制を組むことを想定している。

委員：先程の話にもつながるが、例えば森林資源の中で、木材がどう人の健康に作用するのか等森林生態学の側面の研究も必要だが、商品として杉はどのような本質的価値を持っているのか等を深めていく研究はようやく始まった新しい領域。南三陸でいえば、杉の力がどのようなものなのか、環境研究だけでなく商品の本質的な研究も併せてやってもらえば商品力につながる。

委員：それ自体を企画してお願いして研究してもらう。本体で研究してもらうのが良いのか、外部に依頼して研究してもらうのが良いか。

委員：研究は例えば薬学部や医学部等色々なところで行われている。同じテーマにおいて、様々な研究者がプラットフォームに集い、相乗効果を出しながら研究されていけば素晴らしいと思う。

委員：新技術調査等も期待したい。事業者が知りたいことについて測定できる大学を紹介してくれる対応も期待したいし、商品に落とし込む以前の素材、例えば杉の潜在的機能についての調査や新技術開発研究等にも期待したい。

委員：商品になった時点での評価も必要なのが、根源的な部分の、例えば木は何が良いのかを科学的に裏付けていくことも期待したい。大学間での競争もあり難しいのかもしれないが、現実的かどうかはさて置き、プラットフォームを通じて大学間が連携しながら研究がなされていくということが実現しても良い。例えば最初のうちは各大学の研究発表を行い、その後徐々に一緒にやってみませんかという流れをつくっていくのかもしれない。プラットフォームはつなぎ役としても機能してもらいたい。

委員：素材段階の機能性の研究は大事。ヨモギエキスは昔から消毒の作用があると言われていて、みかんのカビを防ぐための商品が開発され、柑橘の産地で役立っている。例えば杉の強みを見つけて、それを商品づくりに生かしていく展開もあるだろう。

委員：色々なものは解明されつつあるが、個々がばらばらにやるのではなく、皆でやって

いくこと。もしプラットフォームを介して皆でやれれば面白い。

委員：学会のようなものが南三陸に少しずつでもできていけば良い。南三陸は素材段階の学会の聖地を目指すのも面白い。

委員：研究分野に手を出すとしたら、あるジャンルの学会の聖地になるくらいを目指していく。なぜなら学会が開催されれば意外に関係者がたくさん来て町も経済的に潤う。

委員：先生たちの研究は、時に私たちにとってマイナスの意見となることも想定される。それに対して、別の方向性を示してもらうような研究も依頼できると良い。

委員：FSC の審査の際、指摘されたことには重みがある。権威者が集まる状態をつくると、生産者側のクオリティを上げることにもつながる。

委員：中小企業振興条例作成において、最終的な南三陸の条例の方向性として、本物をとことん突き詰める町、これが南三陸の強さではないかという意見が出され、皆納得した。本物を突き詰めるというのは、素材力を引き出して提供すること。では素材の力とは何か、これについてプラットフォームの中で研究していくとなれば、先程の環境的な情緒的価値と本質的価値両方を提供していくことにつながる。

委員：素材をしっかりと育んでいるベストバランスの環境があるからこそ良い素材ができるってしていく。

委員：環境が本物ということでもある。環境が育んでくれた恵み。これを本物として生かすのか、それとも偽物にして提供するのか。加工の段階で様々な事情があり妥協しなければならない局面もあるだろうが、南三陸ではとことん本物を突き詰める。

委員：生活者も商品を選ぶ際に、その選択が環境にダメージを与える結果になるかどうか、その視点も持ちなが商品を選ぶ必要がある。本物を使わないと環境にも負荷を与える結果になるということを理解していく必要がある。

委員：エシカル商品となって受け入れられる市場も。

委員：倫理だけではない。

委員：一方で環境のために我慢しなければならない部分があった場合、それを補う経済装

置が必要。本物を追求する部分と環境保全を追求する部分にギャップが生まれる場合もあるだろうし、そこも想定していく。

委員：機能性だけ訴えても物が売れないで、地元の人にモニターになってもらい、薬事法に触れない範囲で、血液検査等も行いながら商品を紹介していく方法もある。

委員：こういう効果を得られた人たちがこれだけいましたという例が、あちこちで見受けられる状態になると良い。

委員：マーケティングとして PR 段階にまで留めるか、健康食品業界の様にとことんやるか。

会長：これも一つのたたき台なので、次回も引き続き議論したい。

#### 5) 地域資源プラットフォーム 目標数値について

- ・事務局より、資料 4 に基づきプラットフォームの目標数値について説明した。

事務局：本日の議論を聞いていると、ビジネスをどう支えていくかも重要。目標数値については、人数の切り口だけでなく別の切り口もあるだろうから、次回意見を頂きたい。

#### <4. その他（事務連絡等（次回日程、他））>

事務局：ベストバランスの補足資料について。固定されたバランスではない、変動していくものであるということをお伝えしておきたい。例えば経済的に割に合わないから牡蠣養殖をやめてしまった場合、その際のバランスがどういう状態になっているのかを改めて調べる。その時の社会情勢に応じながら変動していくものとして捉えてほしい。

事務局：次回 4 回目は、プラットフォームとして一番必要とされていることは何か、また経済的に成り立つかどうかという点を議論したい。そして 2 月に開催の 5 回目は提言書（案）の内容を確認頂きたい。

- ・その他、議論の中で触れられた、東京大学の先生方の研究発表について、東北薬科大学の佐々木先生のセミナーについて、日時と開催場所が共有された。

#### <5. 閉会>

以上